

夏目漱石

学者と名誉

学者と名誉

木村項きむらこうの発見者木村博士の名は驚くべき速力を以て旬日じゆんじつを出ないうちに日本全国に広がった。博士の功績を表彰した学士会院とその表彰をあくまで緊張して報道することを忘れなかつた都下の各新聞は、久しぶりにといわんよりはむしろ初めて、純粹の科学者に対して、政客、軍人、および実業家に譲らぬ注意を一般社会から要求した。学問のためにも賀すべきことで、博士のためにも喜ばしきことに違ちがない。

けれども今より一か月前に、この木村博士がどこになにをしているかを知っていたものは、全国を通じてわずか百人を出ぬくらいであつたろう。博士が忽然こっぜんと著名になつたのは、今までまるで人の眼に触ふれないで経過した科学界という暗黒な人世の象面に、一点急に輝やく場所ができたと同じことである。そこが明るくなつたのは仕し合せである。しかしそこだけが明るくなつたのは不都合である。

一般の社会はつい二、三週間前まで博士の存在についてまったく神経を使わなかつた。一般の社会は今日とい

えども科学という世界の存在についてはほとんど不関心に打ち過ぎつゝある。彼等らから見て闇やみに等しい科学界が、一様の程度で彼等の眼に暗く映る間は、彼等が根底ある人生の活力のあるものに対して公平に無感覚であつたと非難されるだけで済すむが、いやしくもこの暗い中の一点が木村項の名で輝やき渡る以上、また他が依然として暗がりに静まり返る以上、彼等が今まで所有していた公平の無感覚は、俄然がぜんとして不公平な感覚と変性しなければならぬ。これまではたゞ無知で済んでいたのである。それが急に不徳義に転換するのである。問題は単に智愚

を界さかいする理性一遍の墻かきを乗り超えて、道義の圈内かきに落ち込んでくるのである。

木村項だけが炳へいとして俗人の眸ひとみを焼くに至った変化につれて、木村項の周囲にある暗黒面は依然として、木村項の知られざる前と同じように人からその存在を忘れられるならば、日本の科学は木村博士ひとり一人の科学で、他の物理学者、数学者、化学者、ないし動植物学者に至つては、単位をすら充みたすことのできない出来損できそこないでなければならぬ。貧弱なる日本ではあるが、余よにはこれほどまでに愚図そろが揃そろって科学を研究しているとは思えな

い。その方面の知識に疎い寡聞なる余の頭にさえ、この断見を否定すべき材料は十分あると思う。

社会は今まで科学界をたゞ漫然と暗く眺めていた。そうしてその科学界を組織する学者の研究と発見とに対しては、その比較的価値どころか、まったく自家の着衣喫飯きつぱんと交渉のない、徒事のごとく見倣みなしてきた。そうして学士会院の表彰に驚ろおどいて、急に木村氏をえらく吹聴ふいちようしはじめた。吹聴の程度が木村氏の偉えらさと比例するとしても、木村氏と他の学者とを合せて、一様に坑中に葬り去った一か月前の無知なる公平は、全然破れてしまった

わけになる。いったん木村博士を賞揚するならば、木村博士の功績に応じて、他の学者もまた適當の名誉を荷になうのが正当であるのに、他の学者は木村博士の表彰前と同じ暗黒な平面に取り残されて、たゞ一の木村博士のみが、今日まで学者間に維持せられた比較的位地を飛び離れて、衆目の前に独ひとり偉大に見えるようになったのは少なくてとも道義的の不公平をあえてして、一般の社会に妙な誤解を与うる好意的な悪結果である。

社会はたゞ新聞紙の記事を信じている。新聞紙はたゞ学士会院の所置を信じている。学士会院はもとより己おのれ

を信じているのだらう。余といえども木村項の名誉ある
 発見たるを疑うものではない。けれども学士会院がその
 発見者に比較的の位置を与える工夫を講じないで、いた
 ずらに表彰の儀式を祭典のごとく見せしむるため被賞者
 に絶対の優越権を与えるかのごとき挙に出でたのは、思
 慮の周密と弁別の細緻さいちを標榜ひょうぼうする学者の所置としては、
 余の提供にかゝる不公平の非難を甘んじて受ける資格が
 あると思う。

学士会院が荣誉ある多数の学者中より今年ことしはまず木村
 氏だけを選んで、他は年々順次に表彰するという意を当

初から持っているのだと弁解するならば、木村氏を表彰すると同時に、その主意が一般に知れ渡るようになり計うのが学者の用意というものである。木村氏が五百円の賞金と直径三寸大の賞牌しょうはいに相当するのには、他の学者はたゞの一銭の賞金にも直径一分の賞牌にも値せぬように俗衆に思わせるのは、木村氏の功績を表すがために、他の学者に屈辱を与えたと同じことに帰着する。

(明治四四・七・一四)

日本文学電子図書館

学者と名誉

著 者

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第8巻」角川書店

昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館